

災と東京大空襲で大きな被害を受けたということもあつて富士講の研究はあまり盛んには行われておりませんでした。もしも、故岩科故一郎氏が富士講に興味を示されなかつたら、富士講の体系的な研究は不可能だったのではないか、とさえ思われる程です。岩科氏は専門の研究者ではなく、御実家は新宿の神楽坂で職人をされていた。登山に関心があり、その縁で柳田國男と知り合います。生涯、在野の研究者として過ごされますが、その研究には定評があり、民俗学の第一人者であつた宮田登氏が、岩科氏が都の職員ということから、まず、教育委員会を訪ね、そこで駐車場の係であることを知り、東京都庁の守衛室で富士講の教えを受けたという逸話も残っています。

岩科氏が主宰された「山村民俗の会」には「富士講研究会」というグループがあり、これが現在の「富士山文化研究会」へ継承されました。次回は岩科氏門下の著作を御紹介いたします。

聖地巡拝② 船津胎内

古来、富士山麓で「胎内」と呼ばれるのは、「旧胎内」、船津胎内です。

これは新宿の丸藤講の講祖「高田藤四郎」によつて開かれたという伝承が残っています。御修行をされた方も多くと存じますが、胎内神社の入り口の右上(左の写真の右端)に、藤四郎翁の像が安置されています。



この洞穴は溶岩樹型で、巨木が燃焼した跡と、溶岩ガスが膨張した跡ですので、内部は細く狭く、所々にやっと一人一人が立てるほどのスペースがあるだけです。



今は照明がありますが、かつては左の写真のように蠟燭を持ち、膝に草鞋をつけて這つて御修行されました。この蠟燭の燃え止しは安産の護符として珍重されたとのこと。



おやま道をたどる ②

今年も「吉田の火祭り」が大に行われました。この火祭りは、日本三大奇祭の一つともいわれ、今では吉田浅間神社の神事として書くことのできないものです。元々は諏訪神社の祭であつたとも、ある御師が管理する祭だつたとも言われているようです。

金鳥居から諏訪の森まで一直線に伸びる道端に供えられた大松明は今も昔もあまり変わりませんが、街並みは随分と変化いたしました。左の写真はまだ馬車鉄道の線路の残る大正期の絵葉書。下は今年の火祭りの写真です。



坂を登りきつて、左に曲がると諏訪の森が見え始めます。たくさんの登山記念碑に囲まれた富士吉田元祠があります。



この先は吉田の浅間神社。次回は、その境内の御紹介をいたします。

公益事業報告

本教では、公益事業に積極的に参加しております。本年度上半期の主な参加事業を御報告いたします。

世界平和の祈り



世界の宗教指導者が宗派の垣根を越えて一堂に会し、共に世界平和を祈った「比叡山宗教サミット」が開催されたから、二十三年の月日が経ちました。その間、経済問題、地球温暖化、各地の紛争等いまだ人類は危機状態を脱しているとはいえません。今年も八月四日に比叡山で行われた同サミットに本教も参加し、千名を超える参加者一同、厳粛な雰囲気の中、世界平和の実現にむけて祈りを捧げました。

「このはな会」

清掃ボランティア

私たち日本人が富士山の自然と一体化し、長い時間をかけて創りあげてきた文化や芸術、私たちの生活に根付いた習俗を、日本人の心として、後世に伝えたいという思いから、「富士山の自然と文化にしたいむ、このはな会」を発足し、活動を行っています。本教御信徒のみならず、広く一

般市民の方々にもよびかけて奉仕活動を行うことが本会の目的です。

今年も、八月二十八日に、富士山吉田口登山道の北麓公園から吉田胎内、中の茶屋周辺の清掃活動を行いました。富士山麓とはいえ、酷暑中を皆様爽やかな汗を流して御尽力されました。



富士信仰研究会御一同 本庁に来訪



拓殖大学名誉教授竹谷誠先生が会長を務められる富士山文化研究会御一同が、八月二十九日に本庁に来訪されました。正式参拝の後、富士山の信仰について熱心に情報交換を行いました。また、会員の、故中教正鴨志田与右衛門翁の御子孫である鴨志田潔様から御教祖様に関わる貴重な資料の御寄贈をいただきました。



大教庁からのお知らせ

◆本部祭式研修会が十一月八日から十二日までの日程で行われます。参加御希望の方は、所属教会長を通じ、本庁までお問い合わせ願います。

◆明年一月十二日に、初月並、福德歳開祭が管長御親祭にて行われます。御参加の御申し込みは、所属教会長を通じ、本庁までお願いいたします。

◆本誌は編集の都合上、一部に前年の写真を用いております。御了承願います。

・次回の「扶桑」は年末に刊行の予定です。御意見、御要望とともに各種情報の御提供を願います。

「扶桑」発行元

扶桑教大教庁

〒156・0043

東京都世田谷区松原

一七二一

電話 03(3321)0238